『 On-line みんなで法華経を学ぼう！ 』　vol.10

Jan.2023

―― Let's embark on a journey to discover our own "perspective on the Lotus Sutra".

（みんなで"法華経観"を見つける旅に出よう）

『妙法蓮華経 薬草諭品第五』（迹門・正宗分）

○『又如來の滅度の後に、若し人あって妙法華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』（法師品　二〇二頁 終五行）

○『其の習學せざる者は　此れを曉了すること能わじ』（方便品　八十二頁 四行）

○「習学」の３つのステップ「聞解・思惟・修習」

（『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』）（法師品 二〇九頁三行）

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』（法師品　二〇九頁 三行）

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえる』（『新釈法華三部経　第一巻』　P8・8行／P5・1行）

※ 表記　例：(P353・1行／P259・7行)　⟹　（『新釈・文庫版』頁数／『新釈・単行本』頁数）

◇　◇　◇

＜信解品の復習＞

・四大声聞の懺悔

『又今我等年已に朽邁（くまい）して、佛の菩薩を教化したもう阿耨多羅三藐三菩提に於て、一念好樂（こうぎょう）の心を生ぜざりき』　（一一六頁 終行）

・四大声聞の慶び

「こうした稀有(けう)のお手配を頂いたわが身を、私は自分自身を祝福したいと思います」

・長者窮子の譬え　(P367・1行／P279・終5行)

『四方に馳騁（ちちょう）して以て衣食（えじき）を求め』　（一一七頁 七行）

「あちこちと駆（か）け回っては、衣食の糧（かて）を求めていました」

『涅槃一日の價（あたい）を得て、以て大（おおい）に得たりとして、此の大乘に於て志求（しぐ）あることなかりき』　（一二四頁 七行）

・流浪のあげくの回心 (P370・4行／P281・終3行)

・仏はいつもそばにいる (P389・終4行／P297・5行)

とにかく仏さまは、常に我々のそばにいらっしゃるのです。ですから、自分でつくった煩悩のカラを取り払いさえすれば、仏の慈悲はいつでも我々を温かく包んでくださっていることがわかるのです。

・煩悩のカラを除くには (P391・3行／P298・7行)

どうしたらカラ（煩悩のカラ）を取り除くことができるのか？　言うまでもなく仏の教えを学び、実践し、**自分が『仏の子』であることを悟る**ことです。～　とにかく、我々が仏に気が付かなくても、仏は決して我々を忘れてはいないのだということ、これは絶対の真理であります。～　どんなに背こうとも、背いてから何十年たとうとも、仏は衆生に対して変わらぬ愛情をもってじっと見守り続けていてくださるわけです。涙が出るほど有難いことです

『長者獅子の座に於て、子を見て便（すなわ）ち識（し）りぬ』　(一一九頁 五行)

『我年朽（く）ちたりと雖（いえど）も猶故（なお）貪惜（とんじゃく）す』　(一一九頁 終五行)

・徐(おもむ)ろにみちびく (P402・終5行／P307・4行)

【人を導く時の第一】『徐（ようや）く窮子に語るべし』(一二〇頁 終四行)

・・・ はじめはさり気なく話をかけて、だんだんと話をまとめていく。

・現世利益を説く必要 (P403・2行／P307・終7行)

【人を導く時の第二】『倍（ま）して汝に直（あたい）を與（あた）えん』　(一二〇頁 終四行)

・・・ まず現世利益について話をし、さらに導きの第一歩とすることも方便の一つであることが、ここに示されているのです。～ 宗教活動というものは、生きた人間を相手にした血みどろな闘いです。

『麤弊垢膩（そへいくに）の衣（ころも）を著（き）、塵土（じんど）に身を坌（けが）し、右の手に除糞（じょふん）の器を執持（しゅうじ）して』　(一二一頁 四行)

(P407・2行／P310・8行)

仏さまのこの世への出現を象徴しているのです。柔かい絹の服を着ている身でありながら、わざわざボロをまとい、泥を顔や手足になすりつけ、糞（あくた）をとる器を持って、便所で働く人びとの中に入ってこられたのです。なんとかしてわが子（衆生）を引き上げてあげようという大慈悲心からです。つくづくとそれを思えば、涙がこぼれてくるのをどうすることもできません。

・救い救われる順序 (P410・3行／P313・2行)

① **【慈悲に出発】**第一に長者は『咄（つたな）や男子（なんし）』と言っています。人を救う第一歩は、ああかわいそうだと心の底から湧いてくる情け心でなければなりません。

② **【心のより所を与える】**第二に長者は、所帯道具や食料をあげるから、疑ってはいけないと安心させました。『諸（もろもろ）の所須（しょしゅ）ある盆器（ぼんき）・米麺（まいめん）・塩酢（えんそ）の属（たぐい）あり、自ら疑い難（はばか）ることなかれ』。

③ **【境遇を左右する境地】** 第三に長者は、使用人を付けても良いと言います。『亦（また）老弊（ろうへい）の使人（つかいびと）あり、須（もち）いば相給（あいたま）わん』。今まで人に使われてばかりいた窮子にとっては、人を使うようになるという人生180度転回する画期的な変化です。

④ **【仏に生かされている！】**第四に長者は『我汝が父の如し、復（また）憂慮（うりょ）することなかれ』と言います。本当の神・仏というものは自分の外にあるものではありません。内外の区

別なくこの宇宙に遍満し、すべてのものを生かしている大生命なのです。～ つまり「自分を生かしているのは仏（宇宙の大生命）であり、**あなた自身もまた仏の現れ**だ」ということです。

・仏と相通ずる気持ち (P420・4行／P320・6行)

『心相體（こころあいたい）信（しん）して入出（にゅうしゅつ）に難（はばか）りなし』 （一二二頁 三行）

―― まことに素晴らしい言葉です。

一体の存在として、親しみと信頼感をもって、全身全霊が通い合うというのでなければ、ほんとうではありません。

・仏と衆生は他人ではない (P424・終4行／P323・終7行)

『今我と汝と便（すなわ）ち爲（こ）れ異ならず』 （一二二頁 七行）

「今こそ、私とおまえは別人ではないぞ」というお言葉です。まさしく、仏と衆生とは別人ではありません。それを、われわれ衆生が知らないだけのことです。

・何よりもまず思惟せよ (P446・4行／P339・5行)

そこでお釈迦さまはまず、『思惟（しゆい）して諸法（しょほう）の戯論（けろん）の糞（あくた）を蠲除（けんじょ）せしめたもう』（一二三頁 終行）ことを教えられました。

何よりも**まず「思惟せよ」**と教えられたのは重大なことです。何かを拝めとか、誰かに頼めとは決しておっしゃらないのです。**「よくよく考えなさい」**というご指導なのです。

・黙して之を知る (P474・4行／P361・4行)

『黙（もく）して之（これ）を知る』。われわれ衆生に対する仏さまのお心です。～ 仏さまの方では、常にわれわれを黙して識（し）っておられるのです。ありがたいことです。

・信と解 (P529・4行／403・終8行)

『仏法の大海は、信に能入（のうにゅう）なし、智を能度（のうど）となす』 （大智度論 巻一）

『信有って解（げ）なければ無明を増長し、解（げ）有って信なければ邪見を増長す。信解円通（しんげえんつう）して方（まさ）に行ないの本（もと）と為（な）る』 （涅槃経）

(P534・2行／406・終4行)

仏法を学んで理解が深まってくると、自然とこの情操というものが生まれてきます。その宗教的情操を一般に「信仰」と呼んでいます。～ 人を救うエネルギーが生ずるのです。～ **必ず『信・解』両方を兼ね備えるようにならないと本当に力ある信仰にはならないのだ**ということを、しっかりと胸に刻んでおいていただきたいと思います。

信（しん 感情）
＋
解（げ 理智）
} **信仰**（理智＋情操） ➡ **行ない**

◇ ◇ ◇

＜薬草諭品のあらすじ＞

【仏は衆生のあらゆる機根を知って、法を説き分ける『法王』】――

【一三四頁 一行】その時、世尊は摩訶迦葉（まかかしょう）をはじめとする四大声聞のみならず多くの大弟子たちに、次のように仰せになりました。

「よろしい。迦葉（かしょう）よ。**如来の『真実の功徳』**についてよく説きました。誠に『長者窮子の譬え』で説かれたことは、まさに真実の功徳を説き明かしたものです。し

かし如来の智慧というものは、もっと深く、その智慧の教えには果てしなく大きな功徳があるのです。／（『汝等（なんだち）若し無量億劫に於て説くとも盡（つ）くすこと能（あた）わじ』）それはあなた達がどんなに無限の時間をかけても、決して解き尽くすことができるものではありません。迦葉よ。よく心得なさい。如来は**『諸法の王』**であって、最高の教えである**『真理』**を知るものであります。／（『若し所説あるは皆空（むな）しからず』）如来が説く教えには一切の無駄は無く、空理空論で終わるものはありません。全てが**『真理』**であり、実効性・効果性が必ず現われるものです。如来は全ての教えを知り尽くしているために、あらゆる人々に対して正しい方便を用いて**『真理』**を説くことが出来るのです。そして如来は、全人類がこの世の実相を悟る境地にまで導こうとするものであります」

【一三四頁 六行】（『如來は一切諸法の歸趣（きしゅ）する所を觀知（かんち）し』）「如来は、この世の一切の出来事がこれからどのように推移していくのか、そしてその顛末（てんまつ）がどうなるのかを、手に取るように見通しています。と同時に、／（『亦（また）一切衆生の深心（じんしん）の所行（しょぎょう）を知って』）**あらゆる人々が何を考え、何を願っているか。そして、その心の奥の動きまでを知り、何を行い、何を行おうとしているかを全て見抜いているのであります**。このように如来は、／（『又諸法に於て究盡（くじん）明了（みょうりょう）にして』）一切の出来事の全ての真相を知っているために、あらゆる人々に対して本当の智慧を説き示すことが出来るのです」

【『三草二木の(さんそう にもく)の譬え ／ 薬草の譬え』】――

【一三四頁 終三行】「迦葉よ。この世の全ての山、川、谷、平地にある草木、藪（やぶ）、林、森には様々な薬草があり、種類も名前も形も様々です。これらの草木が渇きで雨を求めている時に、上空に雲が一面に広がり、地上の全てを覆（おお）ったとしましょう。そして雲間から雷が起こり、その音が遠くから聞こえて来ると、恵みの雨を求めているすべての者たちは **【(偈)一三八頁 三行】**（『衆をして悦豫（えっちょ）せしめ』）大いに喜びます。**【(偈)一三八頁 四行】**（『日光掩（おお）い蔽（かく）して地の上（うえ）清涼（しょうりょう）に霺靆（あいたい）垂布（すいふ）して承攬（じょうらん）すべきが如し』）雲は照りつける太陽の光をさえぎり、熱さに苦しんでいた地上は涼しくなっていきます。雲は低く垂れこめ、手を差し伸べれば恵みの雲がすぐにでも手が届くようになります。**【(偈)一三八頁 四行】**地上を覆（おお）う雲からは、四方に等しく雨を降り注ぎます。その雨はどんな草木やあらゆる藪（やぶ）や林、そしてそこに生えている全ての薬草、穀物の苗（なえ）、サトウキビ、ブドウなど全ての農作物に、差別なく平等に降り注ぎます。雨は小さな根も、小さな茎（くき）も、小さな枝も、小さな葉も、そして中くらいの根、茎、枝、葉も、あるいはまた、大きな根、茎、枝、葉に等しく、差別なく降り注ぐのです。仏の教えは丁度そのようなものであります」

【(偈)一三八頁 八行】（『乾地（かんぢ）普く洽（うるお）い　薬木（やくもく）並（ならび）に茂り』）「雨によって乾（かわ）いた大地は一気に活気づき、。**【(偈)一三八頁 八行】**（『一味（いちみ）の水に艸（そう）・木（もく）・叢林（そうりん）　分に隨（したが）って潤いを受く』）薬草や樹木は、それぞれの分に応じて雨を受け止め、みんな勢いよく茂って行きます。**【(偈)一三八頁 終四行】**（『一切の諸樹（しょじゅ）上中下等しく其（そ）の大小に稱（かの）うて各（おのおの）生長（しょうちょう）すること

を得（え）～　一雨（いちう）の及ぼす所 皆鮮澤（みなせんたく）することを得（う）』）全てに等しく降り注ぐ雨のおかげで、根・茎・枝・葉・花・実などは鮮やかに彩（いろど）りを増します。草木にはそれぞれの違いがあるために、同じ雨を受けても生長の仕方、茂り方の違いが生じるのですが、雨が平等に注がれる点では、仏の教えもちょうどそのようなものであります」

（おのおの）**【一三五頁 二行】**（『諸樹の大小、上中下に隨（したが）って各（おのおの）受くる所あり』）「このように雨を受け止める草木のほうでは、草木の大小や種類の違いによって雨の受け取り方に違いが生じます。同じ雲から同じ雨が降ってきたにもかかわらず、草木はそれぞれ成長の度合いが違い、違う種類の花を咲かせ、違う実を結びます。同じ土地に咲き、同じ雲から降り注ぐ雨でも、／（『而（しか）も諸の艸木（そうもく）各（おのおの）差別（しゃべつ）あるが如し』）その雨の受け止め方が草木によってはこんなに違いがあるのです。まさに仏の教えと衆生の関係も、これと同様であると言えます」

――【三草二木(さんそう にもく)の譬え／薬草の譬え】

【一三五頁 四行】【(偈) 一三八頁 終行】「迦葉（かしょう）よ。よく知りなさい。如来は丁度この大雲（だいうん）のようなものです。／（『世に出現すること大雲の起るが如く』）（『世に出現すること譬えば大雲の　普（あまね）く一切に覆（おお）うが如し』）如来がこの世に出現するのは、大雲が世界を覆（おお）い、全体に雨を降り注ぐようなもので、如来は世界中を大きく包み込み、生きとし生けるものすべてを教えによって救おうとされるのであります。そして、如来は一切衆生に、次のように宣言するのです」

【仏の宣言『如来の使命』について】――

【(偈) 一三九頁 三行】『我は爲（こ）れ如來 兩足（りょうそく）の尊なり 世間に出（い）ずること 猶（な）お大雲の如し』）「私は真理の体現者であり、真如の世界からやってきた者です。人間のうちで最も尊い存在です。私が世に出現するのは、まさに大雲がわき起こるようなものであります。／『一切の枯槁（ここう）の 衆生を充潤（じゅうにん）して 皆苦を離れて 安穏の樂 世間の樂 及び涅槃の樂を得せしむ』）「一切の人々の枯れ果てた心に潤いを与え、すべての苦から離れさせ、心の安らぎによる幸福と、世間的な幸せを与え、すべての現象・万物と調和した境地を得さしめるために、この世に出現するのです」

【仏の宣言『如来の十号』を具えた者】――

【一三五頁 七行】「『❶(**【如来】**)／私は真如の世界からやって来た者、**『真理の体現者』**であります。❷(**【応供】・おうぐ**)／世のあらゆる尊敬を受けて供養に値（あたい）する者であり、❸(**【正偏知】・しょうへんち**)／あらゆる智慧を正しく具えた者で、❹(**【明行足】・みょうぎょうそく**)／行学二道を具えた者です。❺(**【善逝】・ぜんぜい**)／あらゆる迷いから離れて、正しき善い行いの実践者であり、❻(**【世間解】・せけんげ**)／世の全てのありようを見極める能力を具え、❼(**【無上士】・むじょうじ**)／この世の最高の人格者です。❽(**【調御丈夫】・じょうごじょうぶ**)／全ての者を意の如くに導くことが出来、そればかりか自身の内面から起こるあらゆる感情・欲望を正しく制御（せいぎょ）出来、❾(**【天人師】・てんにんし**)／天上界・人間界の大導師であり、❿(**【仏・世尊】**)／最高の真理を悟った者、この世において最も尊い存在であるのです』」

【仏の宣言『如来の四弘誓願』】――

【一三五頁 終四行】（『未だ度せざる者は度せしめ、未だ解（げ）せざる者は解せしめ』）「『私は**《苦の世界》から抜け出せない者を救い出し**て、**苦しみから《解放》させる**ことが出来る者であります。／（『未だ安ぜざる者は安ぜしめ、未だ涅槃せざる者は涅槃を得せしむ』）人々を**《安らかな境地》に至らせ**、いまだ本当の悟りを開いていない者に対して**《尊い悟り》を与える**ことが出来る者であります』」

【仏の宣言『すべての者たちよ。ここに集え！』】――

【一三五頁 終三行】（『今世・後世（ごせ）、實（じつ）の如く之（これ）を知る』）「『私は今世の全ての現象のみならず、未来世のすべてを明らかに見通すことが出来ます。つまり、一切の出来事を知り尽くした者であり、**《一切種智・いっさいしゅち》**という平等・差別両面を合わせ知る者であり(**【一切知者】・いっさいちしゃ**)、一切を見極める者であり(**【一切見者】・いっさいけんじゃ**)、真実の道を知る者であり(**【知道者】・ちどうしゃ**)、そして真実の道を人々に開く者であり(**【開道者】・かいどうしゃ**)、真実の道を説き示す者(**【説道者】・せつどうしゃ**)であります。以上のように、如来とは尊い希有の存在です。ですからすべての者よ、天上界の者も、人間界の者も、そして鬼神や全ての者たちよ。／（『皆此（みなここ）に到（いた）るべし』）この尊い教えを聞くためにここに集まって来るがよい』と宣言するのでした」

【仏は、あらゆる衆生の機根の程度を知り、悟りへと導く】――

【一三五頁 終行】「すると無数の衆生が、仏のもとに集まって来て教えを聞くのでした。如来は／（『是（こ）の衆生の諸根（しょこん）の利・鈍（どん）・精進・懈怠（けだい）を觀じて、其の堪（た）うる所に隨（したが）って』）全ての衆生の機根や教えを受け取れる力の程度を見極めており、またどれほどの精進の心と力を具えているか、さらには、怠ける心をどの程度持っているかなどという、その人の程度を全て見極めています。／（『爲に法を説くこと種種無量にして、皆歡喜し快く善利を得せしむ』）そして、その人の程度に応じて数限りない工夫を用いて教えを説き示し、全ての人に喜びを感じさせ、楽しみながら尊い利益（りやく）を得るように導くのです」

【一三六頁 三行】「これらの衆生は、仏の教えを聞いた結果、／（『現世安穏にして後（のち）に善處（ぜんしょ）に生じ、道（どう）を以て樂を受け、亦法（またほう）を聞くことを得（う）』）現世、心の安寧（あんねい）を得て幸せになる身となり、未来に於いても素晴らしい境遇に生まれることが出来るのです。そして教えを学び、習学（実践）した結果、安穏（あんのん）に満ちた人生を送ることができ、未来世においても再び仏の尊い教えを聞くことができるのです。さらに心の一切の迷いや悩みから解放され、仏が説く様々な方便の教えの中から、自分の力に応じた教えを身につけることができ、／（『漸（ようや）く道（どう）に入（い）ることを得（う）』）ついには、**『最高の悟り』**を得ることができるのです」

【仏の教えは『一相一味』（仏の教えは本質的にひとつ〈一相〉、はたらきもひとつ〈一味〉）】――

【一三六頁 六行】「それは丁度、先に述べた大雲（だいうん）が全ての草木や藪（やぶ）や林、そしてあらゆる薬草に雨を降り注ぎ、植物は種類や性質に応じて雨を受け止め、おのおのの個性を活（い）かしながら成長を果たして行くのと同じであります」

【一三六頁 八行】（『如来の説法は一相一味（いっそう　いちみ）なり』）「如来が説法する教えの本質は**『ただ一つ』**であり、はたらきも一つです。つまりそれは、**『すべての人を仏の境地にまで導く』**という一事（いちじ）にほかなりません。／（『所謂（いわゆる）、解脱相、離相、滅相なり。究竟（くきょう）して一切種智（いっさいしゅち）に至る』）いわゆる一切を平等に見るという**『空』**の見方が出来ることで、物事の変化にとらわれない境地に至り**（解脱相・げだつそう）**、一切の差別がなく一方に偏（かたよ）った捉（とら）われの見方から脱却し**（離相・りそう）**、自他の区別を無くし、自他一体の見方が出来る境地**（滅相・めっそう）**に達し、そして最終的には**『差別相・平等相』**を完全に見極める**『最高の智慧』**を具える境地**（一切種智・いっさいしゅち）**にまで全ての衆生を導くのです」

【衆生は『現象や変化』にとらわれ、仏から『功徳』を頂いていることに気づかない】――

【一三六頁 終四行】「衆生は如来の教えを聞いて信受し、繰り返し教えを読誦し、教えを実践して行けば、次第に人間としての価値が向上して行くのですが、／（『得（う）る所の功徳自ら覺知（かくち）せず』）それでも自分にはそうした功徳を頂いていることをなかなか自覚できません。そのことができるのは、境地の高くなった人です。それはなぜかと言いますと、仏法を実生活で実践しても、必ず変化は生じます。しかし、その変化が、必ずしも本人の気に入る現象や変化ばかりとなって現れるとは限りません。そのために、起こる現象と変化に心が奪われてしまい、不幸を感じてしまうのです。じつは好ましくない現象や変化であっても、**素直にそれにしたがって怠（おこた）らずに仏道の修行を続けて行けば、その『好ましくない現象や変化』自体が、将来の『幸福の基礎』になる**のですが、衆生はその**『功徳』**に気づかないでいるのです」

【一三六頁 終三行】「このことがわかるのは、ただ如来だけであって、／（『此の衆生の種相（しゅそう）・體性（たいしょう）、何の事を念じ・何の事を思し・何の事を修し～　何の法を得（う）ということを知れり』）如来は全ての人々がいま現在、声聞・縁覚・菩薩のいずれの機根を具えているのか？　さらに現われる本来の相（すがた）とその人が持つ性質や、その人が何を考え、何を思って修行し、精進しているのか？　また、何を念じて修行しているのか？　さらにはどのような教えによって悟りを得ることが出来たのか？　そうしたその人が行うすべての修行と精進の在り方を、仏は全部見抜いています」

【一三七頁 一行】（『衆生の種種（しゅじゅ）の地に住せるを、唯（ただ）如來のみあって實（じつ）の如く之（これ）を見て明了無礙（みょうりょうむげ）なり』）「衆生は、それぞれさまざまな境地にいて、存在価値があるのですが、自分自身がいま現在、どのような境地にいるのかを正しく理解をしていません。ただ如来だけがそれを手に取るようにハッキリと見極めているのです。それは丁度、先に述べましたように様々な植物が、／（『而（しか）も自ら上中下の性（しょう）を知らざるが如し』）自分の性質の上・中・下を知らないでいるのと同様なのです。しかし如来は、それぞれの人々の境地の違いを見分けることが出来ると当時に、／（『如来は是（こ）れ一相一味（いっそう　いちみ）の法なりと知れり』）それぞれが受持している教えは**『本来は一つ』**であるということを知っています。／（『所謂（いわゆる）、解脱相、離相、滅相、究竟（くきょう）涅槃常寂（じょうじゃく）滅相にして終（つい）に空に帰す』）一切を平等に見る**『空』**の見方が出来ることで、物事の変化にとらわれない境地に至らしめ**（解脱相・げだつそう）**、一切の差別がなく一方に偏（かたよ）った捉（とら）われの見方から脱

却させ(**離相・りそう**)、自他の区別を無くし、自他一体の見方が出来る境地(**滅相・めっそう**)へと導くのです。そうなるとひとりでに全てのものと**『大調和』**する生き方ができるようになり、永遠の安穏(**究竟涅槃常寂滅相・くきょうねはん じょうじゃくめっそう**)を得ることができるのです。全ての人が平等に、この**『一体感』**の境地(**空**)に帰することになるのです」

【仏は衆生の機根に合わせて法を説き、いきなり『真理』を説くことはしない】――

【一三七頁 五行】「仏は、全ての衆生が本質に於いて**『平等』**であり、**『最高の真理』**によって等しく救われることを知っています。そしてあらゆる人々の心の持ち方や、欲望が千差万別であることを見極めています。／（『衆生の心欲（しんよく）を觀（かん）じて之（これ）を將護（しょうご）す』）ですからそれぞれの心の在り方、機根や願望の違いに合わせて巧みに導いて行くのです。じつはこのことが本当にその人を救って行く方法なのであります。／（『是（こ）の故に即（すなわ）ち爲に一切種智（いっさいしゅち）を説かず』）そういう理由から、仏はいきなり**『真理』**を説くことはしません」

【一三七頁 六行】（『汝等（なんだち）迦葉、甚だ爲（こ）れ希有なり』）「迦葉（かしょう）をはじめとするお前たちはこの世では大変貴重な人たちです。如来が人に応じて説く方便の教えの本質をそなた達はよく理解し、それを信受し、身に具えることが出来ました。そなたたちがなぜ貴重なのかといいますと、／（『諸佛世尊の隨宜（ずいぎ）の説法は、解（さと）り難く知り難ければなり』）仏が相手の機根に合わせて説く『随宜説法・ずいぎせっぽう』は、その真意・本質を悟ることは難しいものであるにもかかわらず、そなた達はその難信難解（なんしんなんげ）の教えを、正しく理解したからです。本当に素晴らしいことです」

【(偈)一三七頁 終三行】（『有（う）を破する法王』）「迦葉よ。もう一度言います。如来はさまざまな現象から生じる**『苦』**を打ち破り、人々を救う最高の**『法王』**で、一人ひとりの機根・性質・欲望を見極めて、その人に一番適切な方法を用いて法を説くのであります。そして如来の智慧は深遠でありますが、／（『久しく斯（こ）の要を黙して　務（いそ）いで速（すみや）かに説かず』）一番大事な点、すなわち全ての人が『諸法実相』を悟り、平等に涅槃に達することを急ぎません。時機が来るまで伏せておいて、**『真理』**を性急（せいきゅう）に説くことはしないのです。なぜならば、本当に智慧を具えている者は**『真理』**を聞いてよく理解し、信受することができるのですが、／（『智なきは疑悔（ぎけ）して　則（すなわ）ち永く失うべし』）智慧の足りない者が**『真理』**を聞くと、疑いの心を起こし、かえって永久にその道から外れてしまうことになるからです。／（『力に隨（したが）って爲に説いて 種種の緣を以て 正見を得せしむ』）迦葉よ。このような理由から人々の能力に応じて、それにふさわしい教えを説き、様々な縁を通して人々が**『正しいものの見方、正見・しょうけん』**ができるように仏は導くのです」

【仏は慈雨を注ぐ『大雲』のように、世界を包み込む存在】――

【(偈)一三九頁 五行】「天上界、人間界の全ての者よ、一心に聞きなさい。／（『皆此（ここ）に到（いた）って　無上尊（むじょうそん）を觀（み）るべし』）皆ここに来てこの世で最も尊い存在である**『仏』**を見るがよい。**『仏』**は、ほかの者たちが決して及ぶことのない**『最高の存在』**であります。／（『世に現じて大衆の爲に　甘露（かんろ）の淨法（じょうほう）を説く』）**『仏』**

はすべての人々を安穏な境地へ導くためにこの世に現われ、そして甘露（かんろ）のように誰もが有難く思う**『清く美しい教え』**を説くのです」

【(偈)一三九頁 終四行】「私は全ての人々を差別なく**『平等』**に見ています。／（『彼此（ひし）・愛憎（あいぞう）の心あることなし 我貪著（とんぢゃく）なく 亦（また）限礙（げんげ）なし』）ある特定の人だけを可愛がり、あるいは憎むということはありません。特定の人に対しての愛着や、身贔屓（みびいき）をすることもなければ、分け隔（わけへだ）てをするようなことはありません。／（『恒（つね）に一切の為に　平等に法を説く』）常に一切の人々に隔てなく、**『平等』**に法を説くのです。仏は、身分の上下や行いの善悪、礼節の有無、理解力の優劣や価値観の善悪など、さまざまな人の相違には全く関係なく、／（『一人（にん）の為にするが如く 衆多（しゅた）も亦（また）然（しか）なり』）一人の人に説く同じ教えを、他の多くの人にも変わりなく説き、等しく**『教えの雨』**を注ぐのであります」

【(偈)一三九頁 終行】（『常に法を演説して 曾（かつ）て他事（たじ）なし』）「私は、教えを説くことだけにすべてを集中し、ただ衆生を救うために法を説くのです。そして、雨が地上をあまねく潤（うるお）すように、世間の隅ずみに教えを行きわたらせるのです。それは人々の身分や地位、素行の良し悪し、正見の人や邪見の人、理解力の深浅、様々な根性欲の違う人々に対して、まったく同じように教えを等しく降り注ぎ、そのことを懈（おこた）り、怠けたり、あきらめることなど致しません」

【等しく『法雨』を受ける衆生は、その受け止め方は様々】――

【(偈)一四〇頁 三行】（『我が法を聞く者は 力の受くる所に隨（したが）って 諸（もろもろ）の地に住す』）「私の法を聞く者は、自身の能力や受け取り方の相違に従って、さまざまな境地に達するのです。ある者は人々から重んじられる人となり、天上界に生まれ、帝釈天や梵天など最高の神々と感応同交（かんのうどうきょう）する人となるでしょう。／（『是（こ）れ小の薬艸（やくそう）なり』）しかしこのような人は**『小さな薬草』**に譬えることが出来ます」

【(偈)一四〇頁 五行】「またある人は清浄な教えを学び尽くした結果、心の迷いを去って六つの神通力を得、つまり**『天眼通・てんげんつう／(普通の人には見えないものを見通す力)』**、**『天耳通・てんにつう／(普通の人には聞こえないものを聞く力)』**、**『他心通・たしんつう／(人の心を見通す力)』**、**『宿明通・しゅくみょうつう／(前世を知る力)』**、**『神足通・じんそくつう／(一瞬にどこにでも行ける力)』**、**『漏尽通・ろじんつう／(自由自在に心の迷いを取り除く力)』**を具えて**『縁覚の悟り』**に達したとしましょう。／（『是（こ）れ中の薬艸（やくそう）なり』）しかしこれは、**『中くらいの薬草』**に譬えることが出来ます」

【(偈)一四〇頁 七行】（『我當（まさ）に作佛すべしと 精進・定（じょう）を行ずる』）「そして、**『仏の境地』**を求め、自分は必ず仏の境地になるのだと懸命に努力**『精進』**して一心に**『禅定』**を行じる人は、／（『是（こ）れ上の薬艸（やくそう）なり』）**『上の薬草』**と譬えることが出来ます。

【(偈)一四〇頁 八行】「仏の子としていつも**『仏道』**に専心し、人々に対して**『慈悲行』**を実践し、さらには**『自分は仏の境地に達するのだ』**と信じて疑わないような人は、／（『是（こ）れを小樹（しょうじゅ）と名（なづ）く』）**『小さな木・小樹』**に譬えることが出来ます」

【(偈)一四〇頁 終三行】「そして神通力を具え、（『無量億百千の 衆生を度する 是（かく）の如き菩薩を名（なづ）けて大樹（だいじゅ）と爲（な）す』）無数の人々を迷いの世界から救い、悟りの世界へと導く**菩薩**を、**『大きな木・大樹』**と名づけることが出来ます」

【『法雨』を受ける者の受け止め方に違いがあっても、必ず仏に成ることができる】――

【(偈)一四〇頁 終二行】「仏の教えは、あらゆるものに平等に降り注ぐ**『雨』**だと言えます。仏はただ一つの根本の**『真理』**をさまざまな説き方で説くのであって、仏の智慧を**『大海』**に譬えれば、／（『佛の智慧に於ては　海の一滴の如し』）仏が説く法はその**海の中の一滴である**と言えます。しかし一滴の水と海とは同じであり、違いはありません。つまり本質的には何ら違いはないのであります」

【(偈)一四二頁一行】（『迦葉（かしょう）當（まさ）に知るべし 諸（もろもろ）の因縁 種種（しゅじゅ）の譬諭を以て 佛道を開示す 是（こ）れ我が方便なり 諸佛も亦然（また しか）なり』）「迦葉（かしょう）よ。よく知りなさい。私が過去の様々な実例をあげて法を説き、譬えを用いて仏の智慧を分かりやすく示すのは、私の考えた正しい手段・方便であり、諸仏も同様に行ってきたことであります。／（『今汝等（なんだち）が爲に　最實事（さいじつじ）を説く』）しかし、今こそお前たちのために**『真実』**を述べるのです。諸々の声聞たちは、まだ本当の迷い去ったとは言えませんが、／（『汝等（なんだち）が所行（しょぎょう）は　是（こ）れ菩薩の道なり 漸漸（ぜんぜん）に修学して　悉（ことごと）く當（まさ）に成佛すべし』）皆さんの修行はとりもなおさず**『菩薩の道』**を歩んでいることにほかなりません。今後、段々と学び、教えをしっかりと実践して修行して行けば、必ず**『仏の境地』**に達することができるでしょう」

世尊はこのように、摩訶迦葉（まか　かしょう）をはじめとする聴聞（ちょうもん）の者たちに、**『仏に成る保証』**を示され、お励ましをくださったのでした。そして、次に四大声聞一人ひとりに対して、具体的に**『成仏の保証・記』**を授けるのでした。

◇　◇　◇

正説（しょうせつ）（段）・領解（りょうげ）（段）・述成（じゅつじょう）（段）・授記（じゅき）（段）

【正説】仏が正法を説く。⟹**【領解】**説法を聴聞した衆生が理解した内容を仏に述べる。⟹**【述成】**領解の正しさを仏が認めてさらに説き示す。⟹**【授記】**未来に於いて、仏に成れる保証を与える。

功徳（くどく）

（P25・1行／P17・終4行）

一口にいえば、「人を導き、世を救う徳とはたらき」ということになりましょう。～〈**功**能福**徳**・こうのうふくとく〉～『維摩経義記・ゆいまきょう　ぎき』に、「**功徳**とは福徳。福は福利。**〈人を幸いにする行ない〉**をいう。～**『功』**とは「効能」のこと。善い行いには、他を助け、潤（うるお）し、利益（りやく）を与えるはたらきがある。ゆえに**「功」**と名付ける。しかも、**善い行いは、他を利益（りやく）するばかりでなく、それがそのまま自分の『徳』となる**」とあります。

もともと「功徳」とは〈受ける〉ものではなく、〈与える〉ものであります。～〈与える〉ことそれ自体が〈受ける〉ことになるのです。

人を幸いにするような行いをすれば、その行いが自分をも高めるのです。～**「善能（ぜんよ）く資潤（しじゅん）して行人（こうにん）を福利する」。**行人とは施す人ということです。**善い行い**

を施せば、それは知らず知らずのうちにその人の全身全霊に沁み渡って、その人の人格を潤(うるお)し、高めるのです。すなわち『徳』となるのです

《思惟(しゆい)の分かち合い ①》

「善い行いを施せば、それは知らず知らずのうちにその人の全身全霊に沁み渡って、その人の人格を潤(うるお)し、高めるのです。すなわち『徳』となるのです」と、庭野開祖はお教えくださっています。
―― それでは、私は「善い行い」を実践することによって、自身の人格を「潤(うるお)し、高め」ようと意識しているか？（日頃、少しでも思っているか?）ふり返ってみましょう。

しかし、ここで気を付けねばならないのは、善い行い自体がそのまま自分にはねかえって来るのだと誤解してはならないことです。

そうではなく、善い行いを積み重ねることによって、自分の生き方がひとりでに本来進むべき「正しい軌道」に乗るからこそ、それが健康や環境に現れてくるのです。

（ですから、自分に返ってくる功徳を期待する善い行いは、 ―― 勿論、しないよりいいことなのですが―― 往々にして裏切られることが多いわけです。）(P28・終5行／P20・3行)

※ 梁（りょう）の武帝に対して、達磨大師が「無功徳」と喝破。(P29・3行／P20・9行)

『如来は一切諸法の歸趣(きしゅ)する所を觀知(かんち)し、亦(また)一切衆生の深心(じんしん)の所行(しょぎょう)を知って』 (一三四頁 六行)

「如来は、この世のすべての物事がこれからどのように変化し行き着いて行くかを、手に取るように判っており、**あらゆる人々が何を考え、何を願っているか、心の奥の動きまでを知り、何を行い、何を行おうとしているかを全て見抜いている**のであります」

《思惟(しゆい)の分かち合い ②》

『如来は一切諸法の歸趣(きしゅ)する所を觀知(かんち)し、亦(また)一切衆生の深心(じんしん)の所行(しょぎょう)を知って』の経文に触れて、あなたは何を感じ、何を思いますか？
かみしめてみましょう。

三草(さんそう)二木(にもく)の譬(たと)え

(P37・2行／P27・1行)

《根(こん)・茎(きょう)・枝(し)・葉(よう)》 これらは信仰における四つの要素をさしているものです。つまり**《根・こん》**は「信」。**《茎・きょう》**は「戒」。**《枝・し》**は「定」。**《葉・よう》**は「慧」です。

草木にとって一番大切なのは「根」です。これがなくては茎も枝も葉も出ません。それが**「信」**です。強い「信」があってこそ**「戒」**も守れます。「戒」を守るから**「定」**の境地に入っていくこともできます。その「定」によってこそ実相を知る**「慧」**を得ることもできるのです。

人間の価値を決定するもの　(P39・2行／P28・7行)

人間の価値を決定するものには二通りあります。**「外面的」**なものと**「内面的」**なもの。

○**「外面的」な価値**とは、**自分の頭脳や才能、性格や体力に応じ、自分の持っている力を精一杯に発揮し**、それぞれの職業・役割において**世の中のために充分尽くすことが出来る**かどうか、これこそがその人の人間としての価値を決定するものなのです。

○**「内面的」な価値**とは、つまり「心」です。**立派な正しい精神を持ち、人のために尽くしながら美しく生きていく人こそ、人間らしい人間**、価値ある人間です。この「内面的」価値こそ、**外面的なものよりも深く人間としての価値を決定するものです。**

この外面・内面の人間的な価値を充分に発揮する人こそ**「菩薩」**というのです。

仏の十号　(第２巻P179・3行／P133・7行)

すべて、仏さまの尊称。十の尊称。

＜如来・にょらい＞… 真如から来た人。真如の体現者。

＜応供・おうぐ＞… 供養を受けるにふさわしい人。尊敬を受けるに値いする人。

＜正偏知・しょうへんち＞… この世のあらゆる物事に偏（あまね）く行き渡らせる正しい智慧を具えた人。

＜明行足・みょうぎょうそく＞… 「明」智慧、「行」実践、の二つが満ち足りている人。

＜善逝・ぜんぜい＞… 善（よ）く逝（さ）った、迷いを完全に除き去った人。

＜世間解・せけんげ＞… 人がそれぞれ違った境遇を背負っているのを見分ける力。世間のことをよく知る人。因果の理を解了する人。

＜無上士・むじょうじ＞… この上ない立派な人。無上の人格を成就した人。

＜調御丈夫・じょうごじょうぶ＞… 素晴らしい調教師のように、どんな人をも思うままに導くことのできる人。そればかりか自身の内面から起こるあらゆる感情・欲望を正しく制御（せいぎょ）出来る人。

＜天人師・てんにんし＞… 「天」天上界、「人」人間界の大導師。

＜仏・ぶつ＞… ブッダ。悟った人。

＜世尊・せそん＞… 「世」世の中で、「尊」最も尊重される人。

※〈仏〉〈世尊〉を合わせて〈仏世尊〉とする説。または〈仏〉までを仏の十号として〈世尊〉は別の尊号とする諸説あり。

《思惟の分かち合い ③》

『如来の十号』の中の【応供】と【調御丈夫】ついて――

たとえば人から『感謝』されたり、『讃え』られた際、あなたはそれを「どのように受けて」いるか？（**【応供】**）　また、厳しい外的条件をコントロールして乗り越えたり、自身の内面に起こる感情・欲望を正しく制御しているか？（**【調御丈夫】**）

日頃の自分はどうであるか、ふり返ってみましょう。

仏の四弘誓願（しぐせいがん）

(P46・4行／P33・終3行)

この四弘誓願は、仏を信じ、仏法を学び、仏道を成じようとする者にとって、基本的な共通の総願（そうがん）ですから、よくよく胸に叩き込んで頂きたいものです。

《仏の四弘誓願》	《菩薩の四弘誓願》
『未（いま）だ度（ど）せざる者は度せしめん』	**「衆生無辺誓願度」** 衆生の数は無限であろうとも、必ず一切を度（すく）おうと誓願する。
『未（いま）だ解（げ）せざる者は解せしめん』	**「煩悩無数誓願断」** 煩悩の数は無限であろうとも、必ず全てを断ち切ろうと誓願する。
『未（いま）だ安（あん）ぜざる者は安ぜしめん』	**「法門無尽誓願学」** 仏の教えは無尽であろうとも、必ず学び尽くそうと誓願する。
『未（いま）だ涅槃（ねはん）せざる者は涅槃を得せしめん』	**「仏道無上誓願成」** 仏の悟りは無上であろうとも、必ず成就しようと誓願する。

『我（われ）は爲（こ）れ如來（にょらい） 兩足（りょうそく）の尊（そん）なり 世間（せけん）に出（い）ずること 猶（な）お大雲（だいうん）の如（ごと）し 一切の枯槁（ここう）の衆生を充潤（じゅうにん）にして 皆苦（みな）を離（はな）れて安穏（あんのん）の樂（らく） 世間の樂（らく） 及（およ）び涅槃（ねはん）の樂（らく）を得（え）せしむ』

⟹ **《仏の使命》を宣言**。　（（偈）一三九頁 三行）

《思惟（しゆい）の分かち合い ④》

数々の『仏の宣言』が示されています。『如来の使命/世間に出ずること猶お大雲の如し**』。『如来の十号』を具えた者。『如来の四弘誓願』。『すべての者たちよ。ここに集え！』等々——** これらを聞いてあなたは何を感じるか。かみしめてみましょう。

知道（ちどう）（者）・開道（かいどう）（者）・説道（せつどう）（者）

(P56・終4行／P41・3行)

『我は是れ一切知者・一切見者・知道者・開道者・説道者なり』　（一三五頁 終二行）

「知道者・開道者・説道者」とは、仏さまの**身・口・意の三業**の素晴しさを示します。

《思惟（しゆい）の分かち合い ⑤》

「身・口・意の三業に仏法を行ってこそ、ほんとうの仏の子であります」と庭野開祖はご指導されています。

—— では私は、学んだ仏さまのみ教えを、少しでも**「実践し・人々に教えを説く**(お分けをする)**」を、「身口意の三業」**に落とし込んで実践しているか？

（知道・開道・説道）　振り返ってみましょう。

現世利益の原理　(P62・4行／P45・7行)

『是の諸の衆生、是の法を聞き已って、現世安穏にして後に善處に生じ、道を以て樂を受け、亦法を聞くことを得』　(一三六頁 三行)

『現世安穏にして…』 これはひじょうに大切な問題です。この世においても安らかな生活ができるということです。〜　もしわれわれが見方を変えれば、物事の姿もまるっきり違ってくるのです。『三界は唯心の所現』であり、心が変われば物事も変わるというのは、不滅の真理なのです。

功徳のあらわれはさまざま　(P73・3行／P53・終4行)

功徳とは、人間としての価値が向上してくることです。〜　仏法を信じ、一心にまなび、実践しているうちに、実生活のうえにも必ず変化が起こります。しかし**それは、必ずしもその本人の気に入るような変化であるとは限りません。**〜　その時点では気に入らぬ変化でも、仏道の修行を怠らず続ければ、**その気に入らぬ変化自体が、長い将来の幸福の基礎となる**のです。

《思惟の分かち合い　⑥》

「功徳は、必ずしもその本人の気に入るような変化であるとは限りません」「その気に入らぬ変化自体が、長い将来の幸福の基礎となる」と庭野開祖は説かれています。――
このご指導をあなたはどのように受け止めますか？　かみしめてみましょう。

自分の存在価値を知れ　(P78・終4行／P57・終5行)

〈種種(しゅじゅ)の地〉というのは、それぞれの**人間の存在価値**ということです。

人間は何らかの理由があってこそ、この世に出現しているのです。〜　ところが自分でそれを正確に知るのは難しいことです。多くの人は、自分が宇宙の間に占めている位置、つまり自分の本当の価値というものを知らず、また考えようともしません。〜　しかも、『如來は是れ 一相一味の法なりと知れり』と仰せになっている通り、「すべての人間は平等の存在なのです」。〜　我々は、人間社会における自分の受け持ち、存在価値について、誇りを持たなければなりません。全ての人がそれをやってこそ、人間社会は円滑に運行し、そして限りなく進展していくのです。

『所謂、解脱相、離相、滅相なり、究竟して一切種智に至る』　（一三六頁 終五行）

一切を平等に見るという**【空】**の見方が出来ることで、

⇊

物事の変化にとらわれない境地に至り**（【解脱相】・げだつそう）**、

⇊

一切の差別がなく一方に偏（かたよ）った捉われの見方から脱却し**（【離相】・りそう）**、

⇊

自他の区別を無くし、自他一体の見方が出来る境地**（【滅相】・めっそう）**に達し、

⇊

そして最終的には**『差別相・平等相』**を完全に見極める**『最高の智慧』**を具える境地
（【一切種智】・いっさいしゅうち）にまで全ての衆生を導く。

《思惟の分かち合い　⑦》

『所謂、解脱相、離相、滅相なり、究竟して一切種智に至る』
【空】の見方、一切を平等にみることで⇒ **【解脱相】** 物事の変化にとらわれなくなり、⇒ **【離相】** かたよった見方から脱却でき、⇒ **【滅相】** 自他の区別がなくなる自他一体の境地に至り、⇒ **【一切種智】** 最高の智慧を具えるようになる。
この手順を、あなたはどのように理解されますか。かみしめてみましょう。

仏法の三つの特質

（P92・1行／P67・終3行）

① 『大雲の世間に起って 徧く一切を覆う』（一三八頁 二行）　「雲」は、もともとは大地の水蒸気が立ち昇って出来たものであると同様に、仏教は世間において起ったものであります。天の神といった目に見えぬ存在が天降（あまくだ）ってできたものでなく、**「人間の・人間による・人間のための」教え**です。このことが**仏法の第一の特質**です。

②仏法は『徧く一切を覆う』ものであり、**決して特定の民族や階級だけのものではありません。**これが**仏法の第二の特質**です。

③ 全ての人々は何らかの苦しみや悩みを持っています。打ち続く日照りのもとで草木が雨を待ち望むように、心の渇きを潤すものを欲しています。～　心の渇きをいやしてくれるものは**〈本当の智慧〉**であるというのです。**永久的に心の苦しみを救うのは真理を知る〈智慧〉よりほかにはない**のです。これが**仏法の第三の特質**です。

《思惟の分かち合い　⑧》

『仏法』の特質とは、 ①「人間の・人間による・人間のための」教え。②「決して特定の民族や階級だけのものではありません」。③「永久的に心の苦しみを救うのは真理を知る〈智慧〉よりほかはない」であると庭野開祖は説かれています。
――　このことについて、あなたはどのように受け止めますか？
かみしめてみましょう。

万物と仲よしになる

(P104・3行／P77・4行)

『涅槃の樂』(一三九頁　五行)　最高の涅槃とは、全ての現象から超越するところにあるのではなくて、「全ての現象（万物）と仲よしになる」ところにあります。すなわち、万物と大調和し、すべてを正しく生かしながら、自分も正しく生きていく。

貪著・限礙なし

(P111・終3行／P83・5行)

『貪著なく亦限礙なし』(一三九頁　終三行)　どうしたら愛情の出し惜しみや、人に対する分けへだてを無くすることができるのでしょうか？

一番簡単な方法は「ことあるごとに、仏さまを思い出してみる」ことです、「仏さまはどうか？」とふり返ってみることです。～ これが仏さまの大きな徳なのであります。

《思惟の分かち合い　⑨》

私は、この庭野開祖の教えのように、愛情の出し惜しみや、人に対する分けへだてを無くすために、「ことあるごとに、仏さまを思い出してみる」、「仏さまはどうか？」ということを心がけているか？　日頃の自身の信仰姿勢を振り返ってみましょう。

背くものにも説く

(P115・1行／P85・終2行)

『貴賤・上下 持戒・毀戒　威儀具足せる　及び具足せざる～等しく法雨を雨らして懈倦なし』　(一四〇頁 一行)

身分や地位の上下にかかわらず等しく法を説くのは、少し修行を積んだ人ならできることですが、堕落した者にも、不作法で礼儀をわきまえない者にも、間違った思想にとらわれている者にも、同じ気持ちで説くというのは大変なことです。～ 仏さまは、～ 根気よくお教えになるのです。いいようもないほどありがたいことです。

大樹とは

(P125・終5行／P93・終4行)

『神通に安住して 不退の輪を轉じ 無量億百千の 衆生を度する 是の如き菩薩を 名けて大樹と爲す』　(一四〇頁 終三行)

〈人を救う大道〉は、真理によって心の改造をしてあげることにほかなりません。このような行いのできる人こそ、もっとも価値ある存在であり、**〈大樹〉**なのであります。

《思惟(しゆい)の分かち合い ⑩》

『大樹』とは「人を救う大道を歩み、真理によって人をお救いしようとする人」であり、「このような人こそ、**『もっとも価値のある存在』**である」と庭野開祖は説かれています。そして「**私たちは皆、『大樹』になる道をすでに歩み始めているのです**」とご指導くださっています。
―― この**『もっとも価値のある存在』**である**『大樹』に成る道を、私たちは、すでに歩み始めている**という指導を、あなたはどのように受け止めますか？

拈華微笑(ねんげみしょう)

(P139・1行／P103・終3行)

三草二木(さんそうにもく)の譬(たと)えの要点(ようてん)

(P148・1行／P110・5行)

この譬えは、**仏法のはたらき**についてお説きになったものであります。すなわち、「仏の救いにはいろいろな形があるように見えるけれども、根本においては、仏の教えはただ一つであり、全ての人びとに対して平等に注がれるものである。それを受ける人びとの形の上にあらわれた天分・性質・環境その他の条件が違うからこそ、形の上にあらわれた仏の教えも、その**救いの結果も違うように見えるだけのこと**である。しかし、**形の上では違っているようでも、つまりは全ての人を平等に救うもの**であって、**そこが仏法の至妙**（しみょう）**なところである**」というのがその（三草二木の譬えの）要旨です。
⟹ この譬えに込められた眼目は、
〈仏法の救いの、形のうえにあらわれた差別相と、本質における平等相を知れ〉ということであります。～ まず**〈人間というものの、形のうえにあらわれた差別相と、本質における平等相〉**を、この譬えによって悟らなければなりません。

《思惟(しゆい)のふりかえり まとめ》

今日の**『薬草諭品』**の学びを通して、何を学び取ったか？
（または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか？） 振り返ってみましょう。

以 上